

〔中世〕真坂村

戦国期から見える村名。出羽国秋田郡のうち。天正19年正月17日豊臣秀吉が秋田実李の空知行地を安堵した朱印状写に、「おしきり村・白水沢村・横町村・満さか村・立すミ湊村」484石余とある（秋田家文書）。「文禄元年秋田家分限帳写」では真坂村112石余が鎌田河内守の代官所支配に指定。延文2年・貞和2年など紀年銘をもつ板碑5基が現存するが、石材はいずれも湖東部に散在する板碑と同様、当村内の筑紫岳の石英安山岩であり、当村にこの時期の板碑製作集団が生活していた可能性が強いとみられる。

〔近世〕真坂村

江戸期～明治22年の村名。秋田郡のうち。秋田藩領。藩政初期にまず三倉鼻を開削し羽州街道が当村を縦断することになる。寛永2年海津主馬が鳥屋崎（とりやざき）溜池を利用して指紙開田。延宝4年梅津氏が石山・皆川の両氏に与えた「真坂村之内所古地新開」の指紙写もある（払戸渡部家文書）。「正保国絵図」では真坂新田村204石、「元禄七郡絵図」でも真坂新田村257石余と図示。宝永年間以後、正式に新田の字をとる。「享保黒印高帳」では村高308石余・当高266石余（うち本田87・本田並152・新田27）、「寛政村附帳」で当高272石余（うち蔵分18・給分254）と認定「天保郷帳」では村高266石余。戸数は「享保郡邑記」で27軒、「秋田風土記」で51軒。親郷一日市村の寄郷。八郎潟漁業も盛んであり、「浜井川より真坂迄八竜湖漁獵の地なり」（秋田風土記）という。正徳2年に当村を含む今戸～山本郡ニツ森村間の入会漁業場が確定したという（町史）。村鎮守は八幡神社。幕末に水谷氏らが寺子屋を開く。明治11年三倉鼻小学校開校。同年南秋田郡の村として、戸長投場を一日市村に置く9か村と連合。同18年真坂の石山剛造県会議員に当選。同22年面潟村の大字となる。

〔近代〕真坂

明治22年～現在の大字名。はじめ面潟村、昭和31年からは八郎潟町の大字となる。

〈地誌編〉

まさか 真坂 〒018-16

〔成立〕昭和31年9月30日

〔直前〕面潟村大字真坂

〔世帯〕186〔人口〕727

町の北部。農村地帯。北は琴丘町、西は大潟村に接する。国道7号と国鉄奥羽本線がほぼ並行して中央部を南北に貫通。集落中央部から東に県道真坂-五城目線が分岐。沢田遺跡は縄文中期の集落跡。北端に景勝地三倉鼻があり、背後の筑紫岳の岩石は八郎潟干拓に使用され、現在も採石場として存在。旧高岡小学校校舎を利用した高齢者創作館・駐在所・面潟郵便局・生活総合センター・八郎潟太平自動車学校がある。神社は八幡神社。

（1980.3出版 角川日本地名大辞典 5 秋田県）

5. まさか

天瀬川村から真坂村へは志戸橋村、金光寺村、豊岡村、森岡村を経て林崎村を出てから、台地を下って新屋敷村に入り、ここから浜村、鹿渡村山谷を通過して浜鯉川そして三倉鼻と筑紫岳の間を縫うように右折・左折をくり返しながら山越えして山本郡から秋田郡最初の真坂村へと入って行くことになります。

三倉鼻の頂上の石地藏様を過ぎ下って行くと、途中右手に正岡子規の句碑が建っており、三倉鼻を越えたところの国道7号東側祠には夫殿（オトド）大権現が鎮座しています。

さらに南隣りの南面岡（ひづらおか）公園に進み芭蕉の句碑、そして上のほうにある明治14年（1881）東北巡幸した明治天皇行在所跡を見ながら下って県道に合流し、JR奥羽本線と並行しながら南進します。そして国道7号を越えて真坂村に入ります。

集落中程の郵便局手前から真東に分かれる道があります。これは浦大町・浦横町・岡本をへて五城目村へ抜ける脇道です。

浦大町に入ると北側高岳山の峰続きに、松山・湊安東家の内紛に巻き込まれ落城した三浦兵庫守盛永の中世居城であった全長330mにもおよぶ浦城